



内戦から逃れて

第28号

祖国を離れ 日本でも苦難

アフガニスタンから
クイ・アーマッド・ハレットさん(35)



同じ人間。なぜこんな目に

「武器は家族の日帯と母国を壊した。世界からなくしたい」。東広島市に住み、貿易会社に勤めるアフガニスタン人のクイ・アーマッド・ハレットさん(35)は強く願っています。内戦で故郷を離れ、18年前、命からがら日本に逃れて来ました。平和の大切さともうさを知っています。

アフガニスタンでムジャヒディン(イスラム戦士)による内戦が激しくなったのは10歳の頃。16歳だった1997年、古里マザリシヤリフから首都カブールに移りました。イスラム武装集団タリバンが近づいたためです。

98年、ブローカーの手を借り、単身、タイを経由して東京の親戚を訪ね、救いを求めました。しかし、親身と感ぜられないこともある入国管理局の対応など、

生活の中でしばしば、日本人に自分たちの気持ちが分かってもらえない、と思うこともありました。「同じ人間なのに、なぜ私たちはこんな目に遭ったのか」。母に国際電話して泣いたこともあります。それでも日本語教室のボランティアに仕事をしながら、必死に働きました。2002年、ろ永住権を取得。08年には母国から妻を迎え、12年に東広島市へ引っ越ししました。今は2人の父です。

勉強や趣味を諦めて働き続けただけに、「自分の未来をつくるため教育だけは受けた」との思いが強くあります。海外にあるような支援を望みます。

日本での生活の方が長くなった今、「強国に振り回され、平和の実現が難しい母国に戻る気持ちはない」と言います。「武器を持つ人が力を握れば、言葉一つで人が殺され、戦争が起きる。日本もいつ幸せな生活が崩れるかわからない。武器のない世界の実現を」と語ります。

(高2谷口信乃、高矢麗瑚、高1芳本菜子)

衛生状態の改善が最重要

難民キャンプで活動支援 NPO 法人の渡部朋子理事長

広島市からパキスタンのアフガニスタン難民キャンプを訪れ、現地に診療所を建てる支援活動をした人がいます。NPO 法人 ANTI-Hiroshima (中区) の渡部朋子理事長(62)です。当時のキャンプの状況を聞きました。

(中2岡田日菜子)

パキスタン北部・ペシャワール近郊のキャンプには、2002年以来、計7回訪れました。当初、子どもは教育を受けるのではなく、環境の悪い中、じゅうたんを織るなど重労働を強いられ、栄養不足で母乳は出ません。ミルクを使うが私に届いていません。

水さえ干ばつて汚れ、乳幼児は下痢をしていました。衛生状態の改善が最も必要でした。診療所は安全な出産や衛生教育に欠かせません。原爆で破壊された広島も世界の人の助けで復興できました。被爆2世の私も何か支援できないか考え、資金を募り建設を目指しました。

タリバン掃討作戦を挟み工事が止まった時期もありましたが、2011年に完成。現在は難民や住民たちが委員会をつくって運営しています。毎月約千人に利用され、今も月一回運営状況のレポートが私に届いています。



外国人受け入れ問題 下中弁護士と考えた

内戦から逃れて来る人たちに對して、私たち市民や政府は何をすべきなのでしょう。外国人の受け入れ問題に詳しい広島弁護士会の中下奈美弁護士(59)＝写真＝とともに改善点などを考え、ポイントをまとめました。

(高2谷口信乃)

- 市民レベルで
関心を高める
- 在留資格の基準を
和らげる
- 国際貢献は足元から

市民の関心が高まれば、受け入れに消極的な政府の態度も変わるはず。島国の日本では外国の悪い文化が入るのではと心配する人もいます。しかし、もっと交流し、良い所は取り入れ、悪い所は議論し改めれば良いと思います。

政府に認められず、絶望して帰る人もいます。帰国すれば迫害(はくがい)を受ける恐れのある人たちです。一方で10年以上、認められないまま滞在(たいざい)している人もいます。外国人にとって在留資格を得ることは、いわば「人間」として認められること。日本で働いて貢献(こうけん)してもらおう方が互(たが)いにプラスになるはず。

アフガニスタン内戦

1979年のソ連の軍事侵襲に、米国などの支援を受けた各派が対抗。89年にソ連軍が撤退した後も「ムジャヒディン(イスラム戦士)」同士の主導権争いが続き、国内は混乱を極めた。96年にイスラム武装集団タリバンが首都を制圧し、政権を樹立した。タリバンが保護していた国際テロ組織アルカイダが2001年に米中樞(ちゅうすう)同時テロを起こしたのを機に、米軍などの軍事侵襲を受けた。タリバン政権は崩壊したが、今も米軍のアフガニスタン駐留(ちゅうりゅう)は続いている。



パキスタン・ペシャワールのキャンプのアフガニスタン難民 (1993年撮影)



パキスタンの難民キャンプで援助食糧の配給を待つアフガニスタン難民 (2001年撮影)

ハレットさん
アフガニスタン内戦で1997年、家族とともにパキスタンに避難。その後、単身で、タイを経て98年に日本へ。2012年から東広島市在住。



ボル・ポト政権時代の刑務所を改造した「トゥールズスレン産殺博物館」(1992年撮影)

カンボジア内戦

ロンソノルら親米派が1970年にクメール・ルポト派と内戦を樹立後、極端(きょくたん)な共産主義思想を掲(かかげ)るボル・ポト派が政権を握(とら)り、知識人や政治家らを処刑(しよけい)。都市住民を地方に強制移住(きやくせい)させた。ベトナム軍侵襲(しんこう)で政権が崩壊(ほうかい)した79年までの間に、200万人以上が虐殺(ぎやくさく)や餓(う)えで亡(な)くなったとされる。その後4派による対立が続き、91年にパリで和平協定が結ばれた。

張富さん
ボル・ポト派が政権を握った1975年、農村部へ強制移住させられ、強制労働。79年の解放後、ベトナムの難民キャンプに移り、87年、日本へ。96年、東広島市で開店。

爆弾が、前の人を直撃した

東広島市のカンボジア・ベトナム料理店「アサラス」は、1月、開店20周年を迎えました。店長の張富裕子(カンボジア名・葉園)さん(48)は20年前、カンボジアの内戦を逃れて来日しました。「お客さんの笑顔が日本の私を支えてくれた」と話します。首都プノンペンで暮らしていた1975年、ボル・ポト派が政権を握って生活が一変しました。「3日間だけ」と言われて親元から農村に強制移住。小学生でしたが、親元から離れ、政権崩壊の79年まで、早朝から日暮れまで農作業をさせられました。食事は1日2回。食料を盗んだり仕事を怠けたりすると殺されます。「毎日恐怖(おそ)ろしかった」。解放時は、重労働と栄養不足でつえがないと歩けませんでした。爆撃の中を逃げる途中、爆弾が目の前の人を直撃。肉片が飛び散りました。パニックに陥り、親に会うまで震えが止まりませんでした。

その後、ベトナムの難民キャンプを経て87年、親戚を頼って来日。広島市の鉄工所に勤めて資金を蓄え、料理を通してカンボジアを知ってもらおうと、9年後に店を始めました。年金、医療費、日本国籍の取得…。外国人にハードルの高い日本の制度を痛感してききました。そんなときも、料理を「おいしい」と喜ぶお客さんの笑顔が励みになりました。「強い心を持ち、一日一日に感謝して生きたい。日本で生涯を全うする覚悟を決めています」(高2山下未来、中2川岸真緒、岡田日菜子)



カンボジアから
張富裕子さん(48)